

國學院大學學術情報リポジトリ

《コメント 2》

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒崎, 浩行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001098

《コメント2》

黒崎 浩行

それでは、私のほうからコメントをさせていただきます。四人の先生方のお話の中で、ここが心に残った、重要だと思つたところをまとめさせて頂きました。東日本大震災の地震、津波、原発事故、放射能汚染、そして避難ということによつて多くの命が失われました。また、それまでの生活が失われたというよりは、奪われたといったほうが良いかもしれません。そういった状況が起こった中で、失われた命に対する慰霊・鎮魂、また山名先生から甦りという言葉がありました、再生の祈りというものが営まれています。それが、祭であつたり、祭事・神事であつたり、そして芸能というののも祈りが込められている、ということが非常に重要であることを、今回の様々な先生方のお話から伺えたと思います。

そして、特に懸田先生が強調されていたことですが、故郷というものの存在というものが人々を繋ぐということです。その故郷というのは、土地というよりは人々が伝えてきた祭や芸能というもののなかにも既にふるさつというものがあるのだ、ということが示されていました。そのなかでも懸田先生が強調されましたが、人々の笑顔というものも、そこで人々が互いに心が和んだり和らいだりして交流が生まれていくということが非常に大事なこととしてあるのだということが心に残りました。



しかし、こういったお祭りや芸能、伝統文化といったものが、こういった状況の中で継承することの難しさや危機、というものがあられるわけです。それを何とかして様々な変化を受け入れることで乗り越えていく、そういった姿がみられるということ、またそれを支えるということを懸田先生や上西先生、山名先生もこれまで取り組まれてきたということが伺えたかと思えます。

ここから先は、そういったことを踏まえながら、私なりに十年間振り返りながら感じたこと、考えたことを述べさせていただきます。

それは、当事者と非当事者として考えることができました。この十年の間に、私としては大学の神道文化学部の中で学生を引率して現地に向かったり、また支援活動に関わらせて頂いたりということを模索して参りました。一年目はそれをうまく始めることができませんでしたが、学生たちが集まり、一年間という活動を行って来たか、どういう体験をしたかということを語り合う場として、「震災支援に動いた神道文化学部生の体験報告会」を開催しました。これは、一回目、二回目は教員がプログラムを考えましたが、三回目、四回目は学生たちが企画することになり、その成果を一冊の報告書（『防災とコミュニティを考えるつどい』防災 忘れない！実施報告）にまとめることができました。

また、大正大学が中心となって「東北再生 私大ネット36」が立ち上がり、國學院大學も参加しました。宮城県南三陸町でのボランティアやスタディツアーに國學院大學の学生も参加しました。

そして平本先生が企画コーディネートして下さり、重要な役割を果たされた「陸奥金華山と女川の震災復興に学ぶスタディツアー」（國學院大學研究開発推進機構学術資料センター主催）は四回実施しました。

先ほどの茂木先生の写真の中にもありましたが、いわき市久之浜という地域は、津波で大変な被害を受けました。



【写真1】 福島県いわき市久之浜・星廻宮神社 平成24（2012）年5月26日撮影

また火災が起こって多くの家が焼けました。そして、ここは福島第一原発から三十キロという距離にあったため、避難地域になりました。そういった中で星廻宮神社は流されてしまったのですが、そこに仮社殿が届けられることになり、太田さん（故・太田宏人氏）の呼びかけで学生たちも参加して、その境内を掃除することになりました。それから久之浜ではこれも茂木先生の写真の中にもありましたが、四社合同神幸祭が毎年五月四日に行われていまして、そこで子供たちが楽しめる縁日を開こうということを東京都台東区・下谷神社の阿部明徳宮司が呼びかけて、そのお手伝いをさせて頂きました。

これが震災から翌年の五月に行った星廻宮神社での境内清掃の時の様子です【写真1】。福島県神道青年会の方々や太田さんが集めたボランティアの人たち、そして学生たちが集まって瓦礫撤去を行いました。

そして、これは星廻宮神社の境内があったところで縁日が開かれたところです【写真2】。この近辺は整備されて住宅が建つようになりました。ですから、毎年、この縁日の



【写真2】 福島県いわき市久之浜・四社合同神幸祭 平成26（2014）年5月4日撮影

会場は変わっていくという形ですが、沢山の親子が集まって縁日を楽しむということが行われました。私たちも、そのお手伝いをさせて頂きました。

また、南相馬市の方では、小高区や鹿島区で、福島県・新潟県・熊本県・北海道の神職・関係者の方々が集まり、平成二十五年八月、仮社殿の奉納と縁日の支援ということがありました。これは、熊本県の苓北町（熊本県天草郡苓北志木三）の志岐八幡宮・宮崎國忠宮司が震災直後から現地に入り、ボランティア活動をするなかで、何かできることはないかということを探索する中で、発案されたものです。平成二十四年二月には、人吉市の熊本県立球磨工業高校の実習用に造られた祠が、震災で流されてしまった鹿島区の山田神社に奉納されました。【写真3】は、第二弾として平成二十五年八月に小高区の神社に仮社殿が届けられた時の様子です。

そして、新潟県・熊本県・北海道の神職も集まり、縁日の支援を行いました。その際も本学の学生がお手伝いをさせて頂きました。また、山田神社では、日本文化興隆財団



【写真3】 福島県南相馬市小高区・相馬小高神社 平成25（2013）年8月20日撮影

という神社本庁の関連団体によるコーディネートによって、「みんなの鎮守の森植樹祭」が行われ、学生たちが植樹のお手伝いを行っています。

また、ゼミ合宿では、山田神社の社務所において、山田神社の氏子である八沢千拓土地改良区役員の方と森宮司にお話しを伺う勉強会を開催しました。これは小さな冊子『物語は続く―八沢千拓地と山田神社の再生に学ぶ―』にまとめました。そこでは、震災後にこの八沢千拓地がどのように復活を遂げているのか、また、これから先の見通しについても、率直なお話をお聞きました。そして、四月二十三日にお祭りが行われているのですが、農業とその神事が非常に結びつきの深いものであることや、3・11当日の非常に生々しい体験というものも伺いました。そして、この地域に伝わる獅子神楽が、将来、継承者の存在がなくなる心配もあるのですが、映像記録を作成することで次に繋がるのではないかと、まさに上西先生がそれを体現されていたわけです。

また、千度大祓やゼミ合宿・ボランティアに参加した

学生たちの感想として、現地に行って当事者にお話を伺っていくということが、かけがえのない体験であったということをお聞かしております。

そして、学生たちの体験報告で聞かれたことは、その場所において自分たちは当事者ではないが、別の場所や自分たちが現在暮らしている場所では悩んだり苦しんだりしている当事者であったりする、ということです。また、将来そのようなことになるかもしれないし、そういう関係なのだということを支援交流の場面で感じることがあります。

分かりやすい事例でいうと、学生たちは将来神職になる可能性が高く、その神社で将来災害が起こるかもしれない、実際に災害が起こった地域の出身である学生もいます。このような関係の中で、当事者、非当事者が関わり合うということは、それによって共感が開かれていくということになります。

上西先生のお話の中で、外からの風ということがありましたが、それは外から一方的に風が吹いていくだけではなく、外に更に風が吹いていくということになるのではないのでしょうか。こういった関係の中で、これからの様々な活動を展開していくということが更に模索されていくでしょうし、私自身もそういったことを今後も探究していきたいと考えているところです。私からのコメントは以上です。ありがとうございました。